

各関係機関団体の長  
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長  
(福岡県病虫害防除所)

令和元年度病虫害発生予報第7号(10月)について

このことについて、病虫害発生予報第7号を発表したので送付します。

予報第7号

ハダニ類の防除を徹底しましょう

9月下旬の本圃に定植されたイチゴの予察調査では、ハダニ類の発生が平年よりやや多い傾向でした。

ハダニ類は多発すると防除が困難になります。早期発見に努め、天敵や気門封鎖剤も利用しながら、発生初期の防除を徹底して下さい。

また10月下旬～11月上旬のビニル被覆後に天敵を導入する前には、ハダニ類の発生程度を確認し、必要に応じて天敵に影響のない薬剤を散布しましょう。



ナミハダニの雌成虫および卵

<予想される向こう1か月の天候(令和元年9月28日～令和元年10月27日)>

暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の気温は高いでしょう。  
期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間(数値は予想される出現確率)

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並20 高70% 高い見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み	少40 並30 多30% ほぼ平年並の見込み

(福岡管区气象台 令和元年9月26日発表抜粋)

10月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	10月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
大豆	吸実性カメムシ類	やや多	やや多	並
カンキツ	ミカンハダニ	やや少	やや少	並
カキ	炭疽病 フジコナカイガラムシ	少 並	少 並	並 やや少
果樹共通	チャバネアオカメムシ	やや多	—	多
冬春イチゴ	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類	やや少 並 やや多	並 やや多 多	並 やや多 多
冬春ナス	ミナミキイロアザミウマ	少	少	やや多

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

\* 果樹共通・チャバネアオカメムシの発生量（予報）平年比は年次変動が大きいため—としています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

【普通作物：大豆】

1 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多・前年並

(2) 予報の根拠

ア ミナミアオカメムシの県下5か所の予察灯における5月1半旬～9月4半旬の誘殺虫数(363頭)は、平年(187頭)より多かった(+)。

363頭(平年180頭、前年671頭)

イ 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

- ・ ミナミアオカメムシ・アオクサカメムシ  
10株当たり虫数 0.3頭(平年0.5頭、前年0.2頭)  
発生ほ場率 45.5%(平年27.8%、前年36.4%)

- ・ イチモンジカメムシ  
10株当たり虫数 0頭(平年0.1頭、前年0.2頭)  
発生ほ場率 0%(平年9.1%、前年18.2%)

- ・ ホソヘリカメムシ  
10株当たり虫数 0.1頭(平年0.0頭、前年0.0頭)  
発生ほ場率 9.1%(平年12.9%、前年9.1%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)。

(3) 防除上注意すべき事項

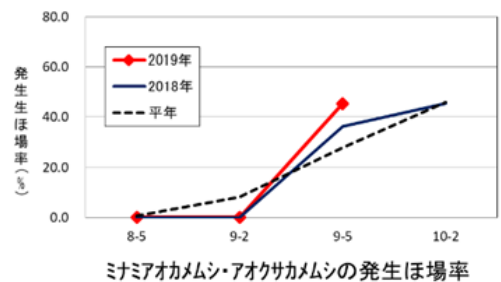
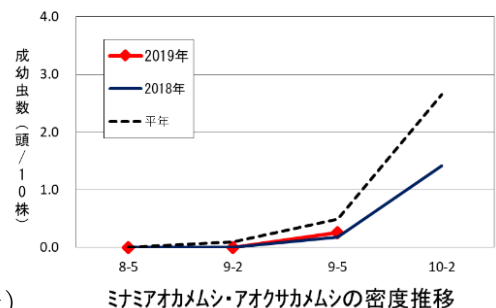
ア 吸実性カメムシ類による子実被害は収穫期まで続くので、必ずほ場での発生状況の把握に努め、発生が多い場合は防除適期(開花期後30日前後となる9月中～下旬頃)から更に7～10日後に追加防除を行う。

イ 薬剤散布を行う場合には、薬剤が着莢部によくかかるように丁寧に散布する。

なお、カメムシ類は広範囲に移動するので、広域一斉防除の効果が高い。

ウ ミナミアオカメムシは例年9月下旬～10月上旬にかけて発生量が急増するので、発生状況には十分注意する。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p8の内容を確認の上適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



## 【果樹：かんきつ】

### 1 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(±)。

発生葉率 2.2% (平年 4.7%、前年 3.3%)

発生ほ場率 30.0% (平年 39.0%、前年 27.3%)

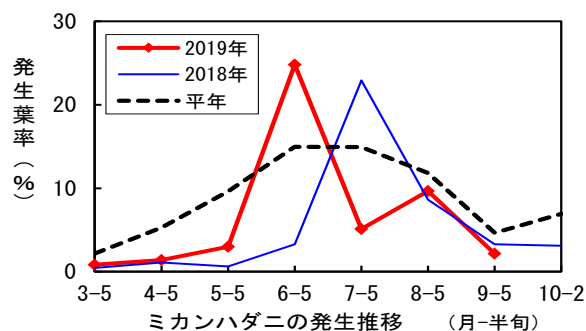
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果実に寄生が認められる場合は、薬剤防除を実施する。

また、薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 8の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



## 【果樹：かき】

### 1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

発病枝率 0% (平年 0.2%、前年 0.1%)

発生ほ場率 0% (平年 12.9%、前年 20.0%)

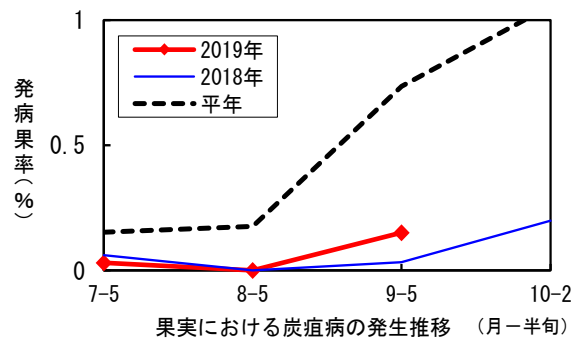
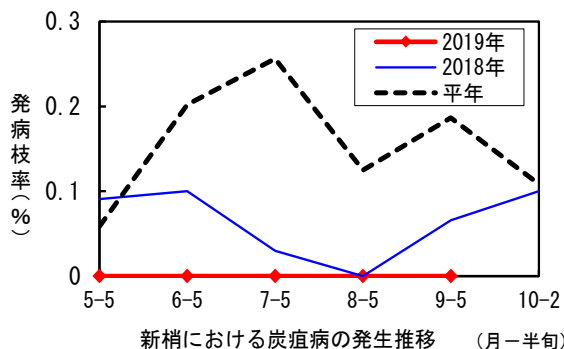
発病果率 0.2% (平年 0.7%、前年 0%)

発生ほ場率 18.2% (平年 36.2%、前年 10.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。



### 2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

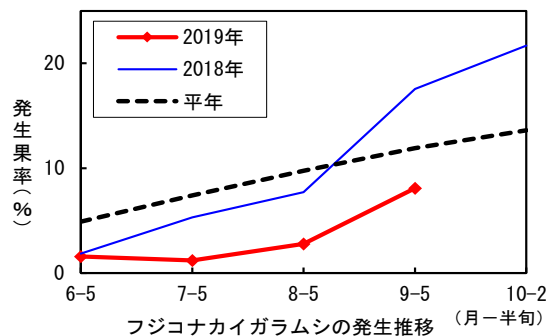
発生果率 8.1% (平年 11.9%、前年 17.6%)

発生ほ場率 81.8% (平年 90.6%、前年 80.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹カメムシ類の防除等で、カイガラムシ類の天敵に影響のある薬剤を使用する際は、フジコナカイガラムシにも効果のある薬剤を選択する。



## 【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

### (1) 予報の内容

発生量：前年より多

ヒノキ球果からの成虫離脱時期は9月2半旬頃で、越冬量と球果量が同様な2016年並と予想していた（8月1日付け、病害虫発生予察技術情報第3号参照）が、一部地域ではヒノキ球果の口針鞘数が少なく、離脱が遅れている地域がある。ヒノキ球果上は成虫比率が高く、一部の予察灯では9月にまとまった数が捕獲された。10月の気温は高いと予報されていることから、今後、地域によっては本格的な飛来があると推察される。

### (2) 予報の根拠

ア 9月2半旬のヒノキ球果の1球果当たりの口針鞘数は2016年より少なかったが、5半旬（7地点）の調査でも16.1本と、離脱の目安である25本/球果より少なかった（±～+）。

9月2半旬の口針鞘数：7.9本（前年は未調査、2016年 20.1本）

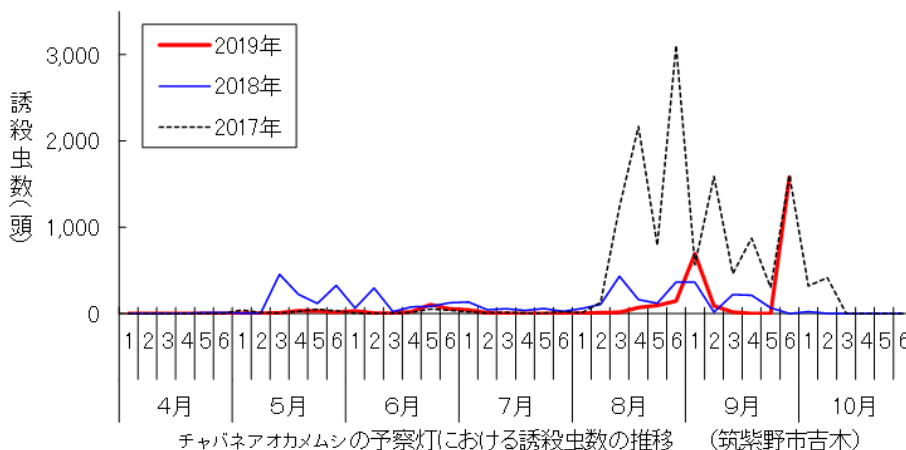
9月5半旬の口針鞘数：16.1本（前年及び2016年は未調査）

イ 9月2半旬におけるヒノキ球果ビーティングによる14か所の捕獲成幼虫数は、2016年並で成虫比率は高かった（±～+）。

平均捕獲成幼虫数：7.9頭（前年は未調査、2016年 7.0頭）

成虫比率：69.1%（前年は未調査、2016年 22.1%）

ウ 8月4半旬～9月4半旬（※）までの予察灯及びフェロモントラップによる誘殺成虫数は、前年より少なかった。しかし、筑紫野市の予察灯では9月1～2半旬及び6半旬にまとまった数が捕獲されている（±）。



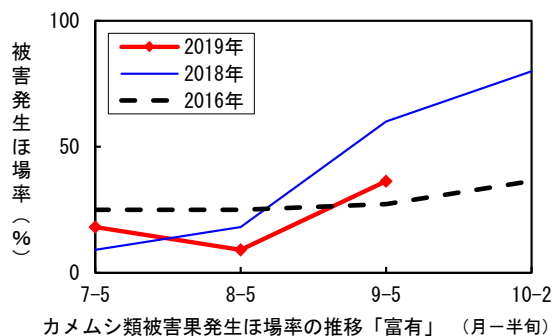
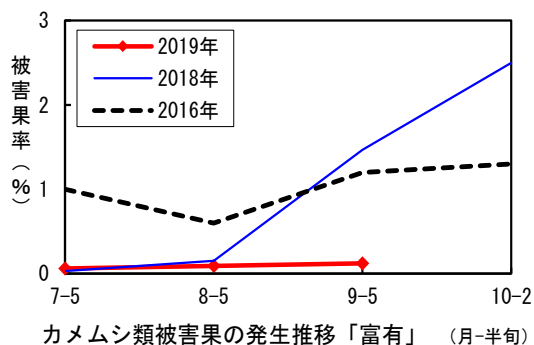
オ 向こう1か月の気象予報では、気温が高く活動が活発化する条件となっている（+）。

カ 8月5半旬（早生品種：西村早生）と9月2半旬（中生品種：早秋、晩生品種：富有）の被害果の発生量は前年よりやや少なかった（±～-）。<各品種とも10ほ場調査>

被害果率（西村早生）：1.3%（前年 4.7%、2016年 2.3%）

（早秋）：3.2%（前年 1.8%、2016年 0.1%）

（富有）：0.1%（前年 1.5%、2016年 1.2%）



### (3) 防除上注意すべき事項

ア 飛来時期は地域により異なる。また、同一園内でも被害発生状況は偏りがあるため、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。

- イ 広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。
- ウ 薬剤防除の際は、収穫前日数等農薬使用基準を遵守する。
- エ 今後の発生状況等については、病虫害防除所ホームページを参照する。  
<<http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html>>

## 【野菜：冬春イチゴ】

### 1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-～±）。

発病株率 0%（平年 0.1%、前年 0%）

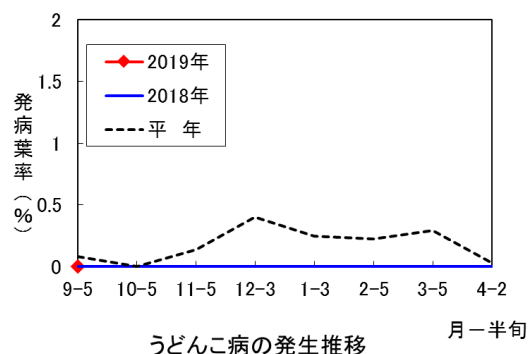
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 不要な下葉は早めに除去する。防除は下葉かぎ後に行うと効果的で、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

イ 9～11月は発生が増加しやすい時期なので、定植後からビニル被覆までの時期を重点的に防除を行う。薬剤については、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 8の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病虫害についても同様）。



### 2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半月調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

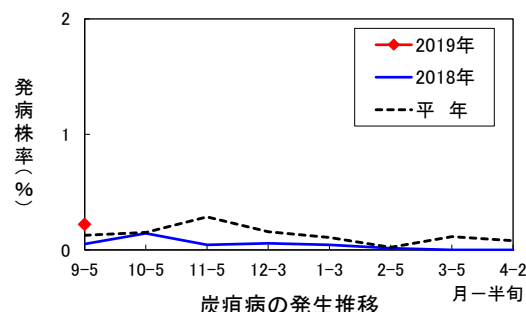
発病株率 0.2%（平年 0.1%、前年 0.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病株は、残渣を残さずに周囲の土ごと掘り取り、速やかにほ場外に持ち出し処分する。

イ ハウス内の排水を回り、多湿にならないようにする。



### 3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。

寄生株率 2.7%（平年 2.0%、前年 0%）

発生ほ場率 44%（平年 29%、前年 0%）

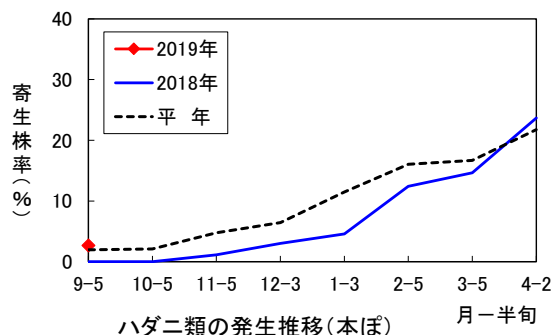
イ 向こう1か月の気象予報ではやや多発生の条件となっている（+～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ぼではビニル被覆後に多発しやすい。多発後は防除が困難になるので、被覆までの防除を徹底し、初期密度を低下させる。

イ 抵抗性がつきやすいので、気門封鎖剤も利用し、同一系統薬剤の連用は避ける。また、ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性が乏しいため、葉裏に薬液が十分付着するよう防除を行う。マルチ被覆の際の摘葉後に、防除を行うと効果的である。

ウ 薬剤感受性が低下しているため、天敵を利用した防除を実施する必要があるが、その場合は、天敵類への影響が長い有機リン系、カーバメート系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。





エ 親株用の苗や補植用の余り苗についても防除を怠らない。

**【野菜：冬春ナス】**

**1 ミナミキイロアザミウマ**

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

発病株率 0.2%（平年 10.0%、前年 0.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

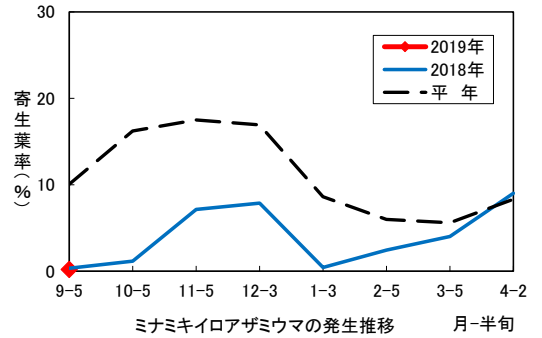
ア ほ場内外の除草を徹底し、本種の増殖源を絶つ。

イ 防虫ネット（0.4mm目合い以下）を展張し、定期的な薬剤散布を実施する。

ウ 発生初期の防除を徹底する。

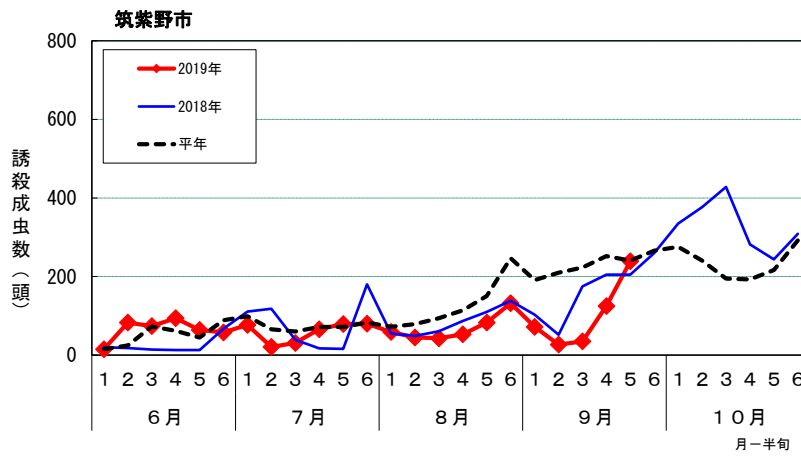
エ 化学薬剤だけでは、アザミウマ類の防除に限界があるため、天敵を利用した総合的防除を積極的に実施する。ハウス内の排水を図り、多湿にならないように注意する。

オ 薬剤抵抗性の発達を回避するために、同一系統薬剤の連用は避ける。

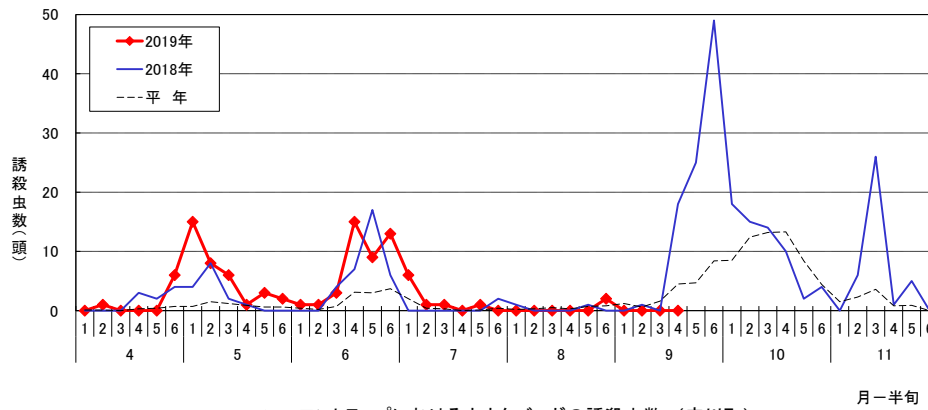


**【野菜：その他の病害虫】**

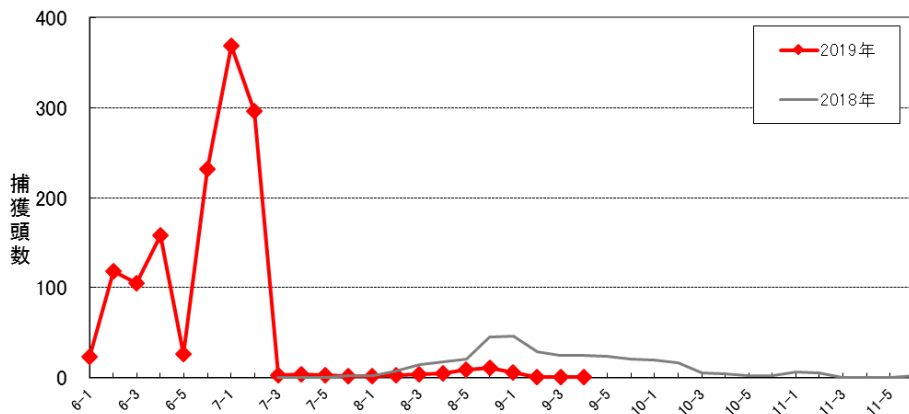
作物名 病害虫名	現況 (発生量)	10月の発生予報 (発生量)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
野菜共通 ハスモンヨトウ	並	やや多	やや多	<ul style="list-style-type: none"> <li>・若齢幼虫は群生しているため、かすり状の葉を見つけ次第、除去・処分する。</li> <li>・今後の発生状況については、地域間差があるため病害虫防除所のホームページを参照のこと（以下の害虫についても同様）。</li> </ul>
オオタバコガ	やや少	並	並	<ul style="list-style-type: none"> <li>・薬剤防除は、若齢幼虫を対象に実施する。</li> <li>・早期発見に努め、初期発生のうちに防除を徹底する。</li> </ul>
コナジラミ類	少	－	並	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほ場内外の除草を徹底し、本種の増殖源を絶つ。</li> <li>・早期発見に努め、初期発生のうちに防除を徹底する。</li> </ul>



フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺虫数 (筑紫野)

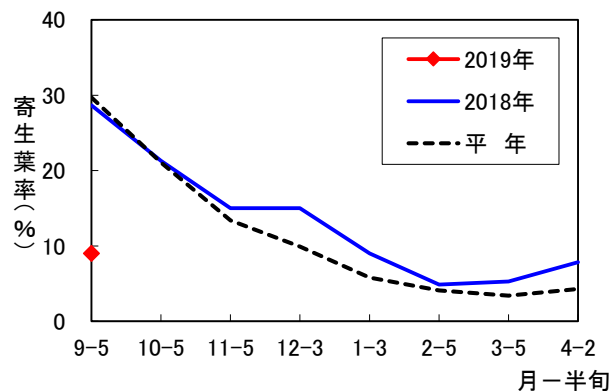


フェロモントラップにおけるオオタバコガの誘殺虫数 (広川町)



黄色粘着板トラップでのコナジラミ類捕獲頭数の推移(うきは市吉井町) 月-半旬

※2018年からの調査のため平年値なし。



冬春ナスにおけるコナジラミ類の発生推移

## 農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等に関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

### 1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

### 2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

### 3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

### 4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

### 5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

### 6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しています。

携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと、病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。

